

マルコによる福音書13章1-2節 「栄光の主」

1A 神殿の破壊

1B 壮麗な神殿

2B 完全な破壊

2A 世界の破壊

1B 天変地異

2B イエスの言葉の確かさ

3A しもべなる主の高擧

1B へりくだられた方

2B 引き上げる神

3B すべてに拝まれる方

本文

マルコによる福音書 13 章を開いてください。午後に 13 章全体を一節ずつ見て行きますが、今朝は初めの 1-2 節に注目したいと思います。「1 イエスが宮から出て行かれるとき、弟子の一人がイエスに言った。「先生、ご覧ください。なんとすばらしい石、なんとすばらしい建物でしょう。」2 すると、イエスは彼に言われた。「この大きな建物を見ているのですか。ここで、どの石も崩されずに、ほかの石の上に残ることは決してありません。」」

イエス様が、エルサレムに入城されてから数日が経っています。イエス様の一行は神殿の敷地に入り、そこで教えられ、そしてそこから出て行って、ベタニアで宿泊されるということを繰り返しておられました。そこで、宮を出て行かれる時に弟子たちが、神殿の石や建物のすばらしさに驚嘆していました。けれども、イエス様は何と、「どの石も崩されずに、ほかの石の上に残ることは決してありません。」と答えられるのです。この場面は紀元後約 30 年と考えられますが、その 40 年後、紀元 70 年に、ローマ軍によって文字通り、そのことが実現しました。ここで、私たちはイエス様の言葉の確かさについて見て行きます。

1A 神殿の破壊

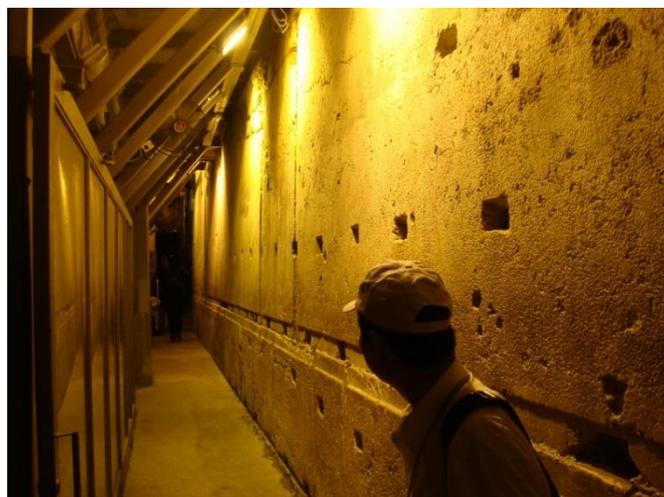
1B 壮麗な神殿

弟子たちが驚嘆した、当時の神殿はヘロデによって建てられたものと言われています。イエス様がお生まれになった時のヘロデ大王のことで、彼がベツレヘムにおられた幼少のイエス様を殺すために、二歳以下の男の子を虐殺しましたが、彼は被害妄想の強い恐ろしい人物でした。しかし、彼には、天才的能力がありました。それが、建築です。

今のイスラエルに行っても、ヘロデの建てた建物や町の遺跡を見るのは、圧巻であります。マサダという自然の要塞が死海の湖畔にあります。その上に、プライベートな風呂を用意した、冬の宮殿を作っています。エリコにも、冬の宮殿の跡があります。そして、ベツレヘムの南にヘロディウムという遺跡がありますが、そこは要塞です。その南にはヘブロンがあり、アブラハムなどが葬られている族長の墓も、ヘロデが造ったのではないかとされています。そして何と言っても、地中海に面するカイサリアがあります。宮殿の跡もありますが、コンクリートを海に沈めて防波堤を作るという技術を、なんと二千年前にすでに持っていたのです。

そして現代の工学をもってしても作ることはできないだろうと言われているのが、この神殿です。ソロモンが神殿を建てたことを思い出してください。それはバビロンによって破壊されました。そして七十年後に帰還民によって再建しました。ゼルバベルとヨシュアが指揮を取りました。エズラも手助けをしています。それが紀元前六世紀の時ですが紀元前一世紀の時、約 400 年後、ヘロデがユダヤ人たちに、この第二神殿を改築すると言いました。改築といっても、ほぼ全てを取り替える、新しい神殿建築です。彼がこのことを話した時に、あまりにも途方もないので、彼はただゼルバベルの建てた神殿を取り壊すだけで、再建はしないだろうと恐れていました。ところが、彼は建ててしまったのです。紀元前 20 年から 46 年経った時、イエス様が宮清めをされた時に、ユダヤ人指導者が、「この神殿は建てるのに四十六年かかった。(ヨハ 2:20)」と言っています。そしてまだその時に建築は完了していなかったのです。紀元後 64 年までかかったと言われています。皮肉なことに、その数年後、70 年にはローマによって破壊されるのですが。

それほど月日かけた、とんでもない大事業だったのです。神殿は大理石で造られ、敷地を支える擁壁は石灰岩を使いますが、ヨセフは、その石の中には長さ 14 尺、高さ 2.5 尺、厚さ 3.5 尺のものがあつたと記録しています。事実、今、残されている石は嘆きの壁と言われる西側の擁壁の一部ですが、そこを北に地下で掘って行って、「西壁トンネル」と呼ばれるところがあります。そこには、巨大な石があります。まさにヨセフが言ったように、長さ 14 尺、高さ 3.7 尺、厚さが 4.3 尺もする石があります。ローマがこれも取り除こうとして上の部分は壊されていますが、無理だったのでしょうか、重すぎて、600 トンもありますから。これをきちんと、ナイフの刃も入れることのできないような隙間もない積み上げで、ここまで運んでくるということは、現代の工学でも解明されていないそうです。ですから、弟子たちが「**なんとすばらしい石、なんとすばらしい建物でしょう。**」と言ったのは無理もないことです。



2B 完全な破壊

ところがイエス様が、とてつもない衝撃的なことを話されます。「この大きな建物を見ているのですか。ここで、どの石も崩されずに、ほかの石の上に残ることは決してありません。」これだけの、とてつもない建物が、ここまで徹底的に破壊されるなど、誰も想像だにできないことであり、そんなことは起こり得ないと感じたことでしょう。イエス様はいろいろな予告をされましたが、復活の次に、とてもあり得ないことと思われたと思います。これが外れれば、イエス様は偽預言者としてのレッテルを貼られてしまいます。

世界において、何千年前であっても、それでも遺跡として残っている建造物はたくさんあります。エジプトのピラミッドがあるでしょう。そして、ギリシアのアテネでは、パルテノン神殿は今のアテネにも町の中心としてその栄光を誇っています。トルコでは、エペソやペルガモンなど、しっかりと町の様子が分かる程に、建造物が遺っています。さらに、ヘロデ大王が建てた他の建造物も、しっかり立っているのです！マサダにある宮殿、ヘロディウム、ヘブロン族長の墓、そしてカイサリア。みな、そこに何があったかを認めることができます。

ところが、エルサレムの神殿の跡は、本当に無くなってしまいました。神殿の敷地を囲む擁壁は、西壁と南壁が一部残っていますが、神殿そのものは全く残された様相がありません。そこは今、岩のドームがあり、アル・アクサ寺院があり、イスラム教の敷地になっていますが、神殿の面影でもわずかにでもあってもおかしくありません。けれどもありません。ここに、強烈なイエス様の言葉の確かさがあるのです。

ヨセフスというユダヤ人の歴史家が、「ユダヤ戦記」というものを書き記しています。そこによると、ローマ総督ティトゥスがエルサレムを攻略するため、そこを包囲しました。けれども、最後の砦、最も強固な要塞となったのは神殿です。そこに多くのユダヤ人たちが逃げ隠れました。ティトゥスは、神殿を破壊しないように命令しましたが、何人かの酔っぱらったローマ兵たちが、神殿に向かって火矢を放ちました。すると、神殿に火が付き、ユダヤ人たちは焼死します。そして、強烈な日の熱によって、神殿に使われていた金が解けて、石の割れ目に入って行きました。その金を分捕るために、ローマ兵たちは石を一つずつとって解体しました。イエス様の言われた預言はそのまま成就したのです。

実は、今、考古学の発掘によって西壁の南側の部分が彫られています。チロペオンの谷にある部分です。嘆きの壁よりも、数メートル低くなっているのですが、当時の西壁に沿った道まで発掘されました。そこに神殿の敷地から落とされた石が今も落ちています。いや、わざと考古学者はそこに一部を残しました。私もその石を見ましたが、焦げています。ここまで、はっきりと当時起こった姿を生々しく残っているのは衝撃的です。イエス様の言葉はその通りになったのです。

2A 世界の破壊

イエス様は、何を見ておられるのでしょうか？それは、簡単に言えば、「人の罪の結果」です。ヘロデは、今でも遺っている建造物と同じように、栄華を誇る神殿も残り、自分の名もそれに付随して残ると思っていたことでしょう。私たちも、永続するであろうと思うことがあるでしょう。そして自分の生活についても、これまでと変わりなく安定して続くと思っているかもしれません。自分の人間関係も、家族や職場も同じように続くかもしれません。けれども、人の罪は自分をそして周りを破壊します。そして、人々が犯している罪はついに世界そのものを破壊へと至らしめます。ノアの時代の水の洪水を思い出してください。それは、人々の悪のゆえに神が裁かれたからです。そして、神殿としてその罪から免れることができず、その壮麗な建築物と宗教的儀式とは裏腹に、実を結ばせていなかったために、破壊へと至るのです。私たち人間は、「罪を犯しても、別に問題はないさ」と軽々しく考えてしまいがちですが、いいえ、必ずそれは破壊へと至らしめるのです。

1B 天変地異

イエス様は、ご自分のことばの確かさを示し、それをもって終わりの日に起こることを語られます。これまでいつも変わらないものだとしていたものが、どんどん崩壊していることを淡々と語られます。民族は民族に敵対して、国は国に敵対します。地震や飢饉があちこちで起こります。けれども、それはあくまでも、産みの苦しみの始まりです。キリスト者たちは、迫害を受けます。そして家庭内で殺し合いまで起こります。そして最悪なのは、ダニエル書で預言されていた「荒らす憎むべき者」が現れることです。彼が、神殿の中に入って自らを神と宣言します。ここからが最悪です、これまでにない大きな患難が来ると、イエス様は云われました。

2B イエスの言葉の確かさ

そして、私たちが最も安定していると思っているもの、そう天と地そのものが瓦解する日が来ることをイエス様は語られます。「24 しかしその日、これらの苦難に続いて、太陽は暗くなり、月は光を放たなくなり、25 星は天から落ち、天にあるもろもろの力は揺り動かされます。」私たちは、このことは信じがたいと感じてしまいがちですが、しかし、あれほどの栄華を持っていた神殿が四十年が経ったら、もの見事に破壊されてしまうのです。イエス様が語られたことは、破壊された神殿を見れば、確かなのです。イエス様は言われました、「31 天地は消え去ります。しかし、わたしのことは決して消え去ることがありません。」この天地が過ぎ去ったとしても、イエス様の言葉は過ぎ去らないのです。言い方を変えれば、イエス様の言葉はそれだけの力を持っておられるということです。

3A しもべなる主の高擧

主は、こうした天変地異が起こったら、自らが戻って来られることを語っておられます。「26 そのとき人々は、人の子が雲のうちに、偉大な力と栄光とともに来るのを見ます。」これまで見てきた、人の造ったものがことごとく破壊されていく姿、また天地が崩れて行く姿は、言い換えると、主の偉大な力と栄光の現れです。私たちは、何か栄華あるものが一気に崩れるのを見る時に、そこに畏

怖の念を抱きます。人には決して抗うことのできない力があり、それが圧倒的に力強いことを心に抱くのです。こうやって、主はご自身が、力があることをお示しになり、終わりの日にはご自身が偉大な力と栄光をもって来られるのです。

1B へりくだられた方

私たちは、イエス様が、へりくだって神に仕えられる方、人々に仕えられる方として見ています。人々を癒され、悪霊を追い出され、恵みの御言葉を語られました。ピリピ 2 章には、こうあります。「6 キリストは、神の御姿であられるのに、神としてのあり方を捨てられないとは考えず、7 ご自分を空しくして、しもべの姿をとり、人間と同じようになられました。人としての姿をもって現れ、8 自らを低くして、死にまで、それも十字架の死にまで従われました。」14 章以降で、イエス様が捕えられて、死刑に定められ、殴られ、十字架刑に処せられます。この時に一切、イエス様は抵抗されず、父の御心に従いました。徹底して、しもべの姿を取られました。

2B 引き上げる神

けれども、ご自分を無にされたからこそ、ご自分を低くすることすれ高めることがなかったからこそ、むしろ神が引き上げてくださいます。今のピリピ書 2 章の言葉は次のように進みます。「2:9-11 それゆえ神は、この方を高く上げて、すべての名にまさる名を与えられました。それは、イエスの名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるもののすべてが膝をかがめ、すべての舌が「イエス・キリストは主です」と告白して、父なる神に栄光を帰するためです。」自分で引き上げなかったのが、神が引き上げてくださいました。よみがえらせ、それから天に引き上げて、今はご自分の右の座に着かせておられます。私たちも、自分で自分の存在を引き上げるのではなく、神がその価値を認め、報いてくださいます。自分が無になれば、その分、神がそこにいられて、ご自分の力と栄光で満たしてくださいます。自分ではなく、神が輝いてくださるのです。

主ご自身は、神の御姿であられること、御子ご自身であられることが、その復活によって公にされました。「ロマ 1:3b-4 御子は、肉によればダビデの子孫から生まれ、聖なる霊によれば、死者の中からの復活により、力ある神の子として公に示された方、私たちの主イエス・キリストです。」酷い死に方をして、完全に死んで、葬られたのです。ところが、その死に打ち勝って甦られたのです！ここには偉大な神の力が働いています。私がクリスチャンになるべきかどうか、迷っていた時に、こんな思いが与えられました。「神を信じるのは分るが、どうして、イエスなんだろう。二千年前の中東に生きていた人をなぜ信じる必要があるのだろうか？」その答えは、「神の御子だから」というものです。神は天地を創造された方で、その方の独り子であるならば、全ての人の神であります。そこに時空間は関係ありません。二千年前であろうが、地球の裏側で起こったとしても、この方は神であられ、私もあがめるべき方だからです。

そして、この方が神の御子であることが、甦られたことによって公にされたのです。パウロは、ア

テネにいる人々にこのように説きました。「使 17:30-31 神はそのような無知の時代を見過しておられました、今はどこでも、すべての人に悔い改めを命じておられます。なぜなら、神は日を定めて、お立てになった一人の方により、義をもってこの世界をさばこうとしておられるからです。神はこの方を死者の中からよみがえらせて、その確証をすべての人にお与えになったのです。」多神教の信者であったギリシアのアテネの人々が、知らないでいたことだけれども、今やイエスが復活したのだから、自分の罪を悔い改めるように命じられているのだということです。自分に罪があり、それを悔い改めて罪の赦しを得る必要があるのだということです。それは、神がイエスをよみがえらせたことによって、確証が与えられているとのことです。

そして、その復活に現れた力をもって、今度は全ての人を、義をもって裁かれます。それが、主が再び来られる時に行われることです。にわか信じがたいことかもしれませんが、イエス様は死者の中からよみがえられたのです。その力と栄光があれば、再び来られる時も偉大な力と栄光を持ってこられることは容易に想像できるのではないのでしょうか？

3B すべてに拝まれる方

そして先ほどのピリピ書 2 章には、こうパウロが言っていました。「すべてが膝をかがめ、すべての舌が「イエス・キリストは主です」と告白」するということです。イエス様が来られる時には、救い主としてこの方を受け入れている人々だけでなく、罪と不正の中に生きていて、悔い改めるつもりのない人々も、否応なしにこの方が主であることを認めざるを得ません。「イエス・キリストは主」という告白は、全ての人ができることとなります。それが、ある人にとっては救われるための告白ですが、他の人にとってはそれが裁かれるための告白にもなるのです。

午後の礼拝でじっくりと、13 章で起こる徴を見て行きます。私たちの前に、イエス様がかつて語られたことが、いろんなことで起こっています。地震はそうでしょう。国と国の敵対関係もそうです。そして、イスラエル人が散らされていたところから集まって、そこに国が建てられたということも徴です。ですから、こういう時代に生きているということをわきまえて、私たちはますます、主の御心は何かを熱心に求めないといけません。さもないと、あまりにも容易に世の価値観に流されてしまいます。確かな預言のことば、イエス様のことばに目を留めましょう。それによって、霊的に成長し、主が来られる時に救いを得ることになります。「1 ペテ 2:2 生まれたばかりの乳飲み子のように、純粋な、霊の乳を慕い求めなさい。それによって成長し、救いを得るためです。」